

# ダイキン工業株式会社の支援による知床世界自然遺産地域保全事業

## 2021 年度 活動報告書

### 1. 多様性に富むしれとこの森を復元する事業

#### 1-1. 100 平方メートル運動の森・トラストおよびその関連事業

「しれとこ 100 平方メートル運動」(斜里町主催)では、開発の危機にあった開拓跡地を買い取り、かつて知床にあった森を復元する取り組みを行っています。1977 年に始まったこの運動は、多くの方々からの支援を受けて開拓跡地の買い取りを完了し、1997 年からはその土地を多様性に富む森へと復元させる取り組みを進めています。

##### 1-1-1. 針広混交林の復元

昨年度に引き続き、重機を用いたササ地の掻き起こし作業を行いました(写真 1-1)。一度ササに覆われた場所では、他の植物が日光をめぐる競争に負けて生育することができません。そこで、ササを根ごと掻き起こして衰退させ、新たな木々の更新を促進させる取り組みを行っています。この作業を始めてから 5 年目となる 2021 年度は、岩尾別地区にある列状アカエゾマツ造林地のササ地約 1 ヘクタールの掻き起こしを行いました。その他の場所では、ササ地の積極的な森林化の取り組みとして、刈払った後のササ地に広葉樹の中型苗を植樹する作業を行っており(写真 1-2)、現地にはその取り組みに関する解説看板も設置しました(写真 1-3,1-4)。

ササ地の森林化の取り組み以外にも、エゾシカから既存の森林や苗木を守るために設置している防鹿柵の巡視を行い、倒木などによる破損を発見した際は修繕し(写真 1-5,1-6)、柵の維持管理に努めました。

運動地内を流れる岩尾別川では、かつて生息していたサクラマス等の復元など河川環境の改善に向けた取り組みも行っています。9 月末に岩尾別川支流の盤ノ川にて魚の往来を妨げていたコンクリート落差を解消するために、簡易魚道を設置しました(写真 1-7)。魚道の構造材の一部には、森林再生事業で発生したアカエゾマツの間伐材を有効活用しました。しかし残念ながら、11 月に発生した記録的な大雨による増水で、簡易魚道は半壊する事態となりました(写真 1-8)。直ちに設計者と現地確認を行い、破損部分の構造を強化した設計を再検討し、次年度に修繕する計画を進めています。今回設置した簡易魚道の下流側には林野庁所管の砂防ダム 2 基があり、それらのダムの改良工事が完了すれば、サクラマスの遡上域が上流側へ約 1 キロメートル広がることが期待されています。第一期支援期間の岩尾別川流域における河畔林の復元とも深い関係がある河川環境の改善により取り組むことができました。



写真 1-1. 重機を用いたササ地の掻き起こし作業  
(2021年6月8日)



写真 1-2. 刈払ったササ地へ広葉樹中型苗を移植している様子  
(2021年10月4日)



写真 1-3. ササ地の森林化の解説看板を設置  
(2021年10月4日)



写真 1-4. アカエゾマツ造林地へ広葉樹中型苗を移植している様子  
(2021年5月17日)



写真 1-5. 防鹿柵への掛かり木の除去作業の様子  
(2021年6月10日)



写真 1-6. 防鹿柵の補修作業の様子  
(2022年2月29日)



写真 1-7. 盤ノ川簡易魚道の完成状況  
(2021年9月28日)



写真 1-8. 盤ノ川簡易魚道の破損状況  
(2021年11月11日)

### 1-1-2. ダイキン工業社員ボランティアの受け入れ

2021年度は2年ぶりに秋（9月）のダイキン工業知床ボランティアを開催することができました。冬（2月）のボランティアも準備を進めていましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止となりました。なお、本事業ではこれまで18回のボランティアを開催し、のべ196名の社員の皆さんにご参加いただいています。

### 1-1-3. 次年度以降の課題と目標

運動地内には、開拓後40年以上経ても森林に遷移しない「牧草地・ササ地（未立木地）」が点在しており、この未立木地の森林化が中長期的な課題となっています。そのため、過去4年間に本事業を含めて合計1.8ヘクタールのササ地の掻き起こしを実施してきました。運動地には未立木地が約41ヘクタールあることから、森林化が進む場所を選択しながら、今後も継続して実施する必要があると考えています。また、順調にササが衰退した場所であってもエゾシカの採食圧は依然高い状況にあり、樹皮保護ネットを巻いた広葉樹中型苗の移植も合わせて実施するなど、効果的な森林化の手法を見出す必要があります。

運動地におけるエゾシカの生息密度は、以前に比べると低くなってきましたが、未だに樹皮食いの被害は確認されており、防鹿柵の維持管理は継続して実施したいと考えています。

本事業の第1期支援期間に行った岩尾別川流域の河畔林の復元は順調に進んでいますが、関連する河川環境の改善には砂防ダムの改良など課題が残されています。林野庁所管の砂防ダム2基の改修工事については、2年後を目途に工事が着工される予定となっており、河川環境の改善に大きな進展が期待されます。次年度には盤ノ川の簡易魚道の修繕を行って、その後も魚が利用できる状況であるかを確かめながら、実施可能な河川環境の改善の取り組みを進めたいと考えています。

## 2. 世界遺産の価値を守り、伝える事業

### 2-1. 次世代へ知床の森をつなぐ活動

本事業では、世界自然遺産知床の魅力や価値を次世代に伝えること、更には未来の知床の自然保全分野で必要とされる人材を育てることを目的に、地元の子供たちが参加する自然学習活動を支援しています。

#### 2-1-1. 次世代を担う子供たちを対象とした環境教育活動への支援活動

斜里町や羅臼町の小学校では毎年総合学習の時間を用いて知床の自然を学ぶ授業が行われています。2021年度は斜里町立知床ウトロ学校で、知床に生息するカエル等の両生類をテーマとしたペレケ川左岸池での観察学習や、海洋生物をテーマとしたチャシコツ崎での生き物観察学習などをおこないました。また、知床の自然・文化を地域の子どもたちへ体験し伝える活動「知床博物館キッズ」事業では、8月に斜里川流域でオショロコマやサクラマス（河川残留型）など知床を代表する魚類を子どもたちと採集し学べる観察会を実施しました。

これら水辺をフィールドとした活動ではいずれも寄付によって購入したウェーダーを活用し、児童が安心して学習に集中できる環境作りに大きく寄与しました。これからも世界遺産の地で生活する地域の子どもたちに、豊かな自然を伝えていく活動を継続していく予定です。

かつてあった知床の森の姿や開拓の歴史、現在行われている森づくりについて広く一般の方に伝えるための絵本製作プロジェクトが2020年から2か年計画で始動し、今年度3月、ついに絵本「みずならがはなしてくれたこと」が完成しました。絵本の巻末には、知床の森づくりの現場や100平方メートル運動の歴史をイラストや図表でわかりやすく解説したページなどを組み込み、本体のストーリーだけではなく、知床の森づくりの背景も伝える内容の一冊としました。奥付には寄付金による製作支援についても記載しました。



写真 2-1. 知床博物館キッズの「川の生き物観察会」の様子



写真 2-2. 斜里町立知床ウトロ学校3年生の総合学習「チャシコツ磯の生き物観察学習」



写真 2-3. 絵本「みずならがはなしてくれたこと」の表紙画像

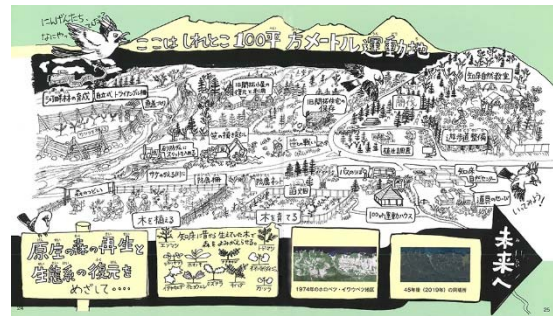


写真 2-4. 絵本「みずならがはなしてくれたこと」の巻末ページ

コロナ禍が続く中、学校での出前授業や、実際に現地にて開拓の歴史や運動の歩みを学ぶ授業を可能な限り行いました。知床ウトロ学校 4 年生および斜里小学校 4 年生、斜里高校 1 年生の授業では、当事者意識を育てる目的で植樹作業を行いました。また、東京農業大学オホーツクキャンパスの学生実習を受け入れ、森林生態学の研究者を目指す学生に対して実践的な学びの場を提供しました（写真 2-5,2-6）。



写真 2-5. 開拓小屋コースを散策する斜里小学校 4 年生（2021 年 9 月 10 日）



写真 2-6. 作業地を見学する東京農業大学 3 年生（2021 年 7 月 8 日）

## 2-1-2. 知床来訪者へ自然保全や森林復元の取り組みを伝える活動

「しれとこ森づくりの道」遊歩道の維持管理を行いました。しれとこ森づくりの道では、「シカ柵コース」と「開拓小屋コース」の 2 つの遊歩道を設定しています。これらの遊歩道は、より多くの方々に開拓の歴史や実際の森づくりの様子、運動地の自然について知っていただくことを目的として開設しています。2021 年度もコロナ禍ではあったものの、一年を通して一般公開することができました。4 月の雪解けとともに両コースの利用を開始し、利用者数カウンターのある開拓小屋コースでは 1,339 名の利用がカウントされました。10 月には開拓小屋コースの魅力向上を目的として、終点にアカエゾマツ間伐材で製作されたアート作品を展示しました。

## 2-2. ヒグマと人の共存を手助けする活動

羅臼町で実施している「ヒグマと人の共存を手助けする活動への支援」事業は、第1期に設置した電気柵の維持管理に加え、新たに電気柵非設置エリアへ対し、「ヒグマが出没しにくい町づくり」という目標を設定しました。具体的には、住宅地付近のアキタブキ、オオイタドリ、クマイザサ等の草丈の高い藪を刈り払うことにより、見通しが良くヒグマが身を隠せず、餌場や移動経路として利用しづらくし、人の居住エリアにヒグマが侵入しにくくなるような環境とすることを目指しています。

### 2-2-1. 第1期に設置した電気柵の維持管理

電気柵設置期間は、例年であれば雪解けが進みヒグマの活動が始まる前から冬眠までの概ね4月下旬から12月下旬までとしています。今年度については、市街地を囲う電気柵の設置を4月中旬までに完了しました(写真2-7, 2-8)。また、北浜～相泊区間でも残雪の様子を見つつ、5月21日までに設置を完了させ、例年よりも早く通電を開始しました。

電気柵は、ヒグマが忌避する目安の4,000V以上の電圧を維持することが肝心です。通電ラインへの草木の接触による漏電、倒木等による断線をはじめ、ラインの腐食・摩耗といった問題箇所への現場対応をおおよそ週1~2回実施しました。

電圧チェックは日常的に行い、低下していた場合には直ちに修繕、バッテリー交換といった維持管理作業を行いました。また、市街地中心に設置している電気柵については、2020年度導入の遠隔電圧監視システムの運用により、パソコンや携帯電話で随時通電状況の確認を行いました。さらに、繁茂した草本がラインに接触しないよう草刈りについても必要に応じて行い、一部省力化のため除草剤を活用しました。



写真 2-7. 電気柵の立ち上げ作業の様子



写真 2-8. 電気柵の立ち上げ作業の様子

## 2-2-2. ヒグマを住宅地周辺に近づきにくくする環境づくり（藪の刈り払い）

羅臼町内の住宅地周辺には、アキタブキやオオイタドリ、クマイザサなど 2m 近くになる丈の高い草本が繁茂している藪が多々あります。ヒグマは、これらの藪を移動経路とするだけでなく、身を隠し初夏の主要な餌となっているアキタブキを採食する場として利用します。またこのような場所は、視界の悪さから人とヒグマが至近距離で接近する危険性も高くなります。そこで第 2 期では、住宅地に隣接する藪を刈り払い、ヒグマが近づきにくい環境作りを行っています。

町内会活動をサポートする形で 2019 年から実施している「草刈りイベント」は、羅臼町役場からの職員参加があっただけでなく、町内への呼びかけにも役場の方々に協力いただき、活動が町内全域に広がっていきました。また 2020 年からは町内建設業者等の参加もあり、ヒグマ対策への「輪」がさらに広がりつつあります。参加地区・のべ人数は、2019 年に 2 地区 12 名、2020 年に 11 地区 179 名、2021 年に 10 地区 157 名となっています。町民と共に汗をかくことで、ヒグマ対策への考え方を共有しているようにも感じ、作業後は充実した気持ちを得ることができ、また、寄付事業の長年にわたる継続により、私たちのヒグマに対する取り組みへの理解が少しずつですが町民へ浸透してきていることを実感しています



写真 2-9. 草刈りイベント開始時ミーティング



写真 2-10. 草刈りイベントの様子（八木浜町）

※画像および文章の無断転用はご遠慮ください。